

正ほん分げん札し限げん

智ち惠ゑ秤ひかり

万亭應賀著

○或ある市長まちのちやう戸籍こけの者もの云いふ

吾われ區くわの者ものを今日けふ殘のこらば番所ばんじよへ呼集よあて更に申渡まをせと
 耳みみがいとくしゆよく聞きべし。そゆ人のうちには已おのれふ智ち
 惠ゑのるき者もの他のち忍しのを取とて已おのれが看板かんばんとして愚おろ人どふ
 貴たかまじき者ものけり。又また身み小罪科せうざいある者もの辯舌べんぜつと綾あや
 たりて其咎そのとがと免ゆるぎ者ものけり。まゝ罰おとなき者もの他の讒そと
 言ことに罰おとと請うける者ものあり。是これ何なにゆへとつゝ不識ふし人の



口と心不と齟齬のるるまば是まで其言葉を
りて邪正明白の裁判を甚難うりて方今開
明の秋いより吾朝の寶器とりて人の言葉を
聞て智者と愚者とを區別し人の邪正を由一決
に及ぶとあり。それ世界廣しといへども此御宝
物も吾國のこゝにあり。今海外に究理發明の國に
とあるとりのども更なるまき、珍器かりて第一
なるる五常の玉第二に智惠の稱第三に邪
正現察の鏡なり此第一の玉は吾國王常に御身

を保護せられて萬民へ五常の道と厚く惠せ
らるるのうら時々諸人の為あることを御布告
あまど由下に邪慙の者多くありて己が益ある
ことを顧ぬのこゝにみらば。そまてひそかに謗りの由
そま人々安泰小妻子を養はんと思ひ第一に智惠
を磨きて旧き弊病を癒せよとある苦き藥の如き
教を守りて童を人とする人小育てんと思ひ甘菓比
ごとき姑媳の愛を捨て、熱き灸をひくとき業を
へねをその病根次第に昇進して吾口一ツを養ひまぬ

鈍徒者のろまとあるぞうー都まて此世界へ生れる一切しんがらのもの
口くちをくちとせよとやいふ人の天てんより授けし人のくちを
るれば野山やまに住鳥獸ちうぶつありひもとせんむう家の蠅はも
ゆりぐくちハハとれとやいふ人のうちあり我口を
こが養へぬりのいふゆもけりさすまの萬物の靈たまふい
あしや萬物の活糟いさざうなりその糟の身みが美服びふくを着き
美味みちと恣しふる人のをり鳥けりの虫けりより問とひま
るい何なにと答こたふや。アとらうーや口惜くちがやさきは智慧ちゑとあり
て正業せいぎふを営いむべき小さとるく贅業ちゑぎふとある意いといふ人

ち急いそもあるたせふ懐手かゝりてふて大金たかひをりうけんと工たくのうらう反かへて
元手もとてまてとらうーあるその者ものを自業じぎふ自得じとくなれど口くち々に
成長せいぢやうある童こどもとち若わかひ者もの。渠等そのらの惡業あくぎふを見習みまふ時ときの惡あくふ
い深ふかりやまきみの更次第さらだ不ふ惡あく風烈かぜとせとあるを
御上ごうみて深ふかく御憐察ごれんさつ持もてさうふようく此度このたび第二第三の
御寶ごほうと此所このところ不ふ取出しゅしゅさうして人智じんち試し所じよするさせらる。尤ちよ智慧ちゑ
の秤はかりは其身そのみの肥瘦ひしゆ不ふ拘からば唯ただ智慧ちゑの重輕おもかるを分わかつふ
ぎの御器ごぎるりその智慧ちゑふも又また善智ぜんち惡智あくちあまふ則すなはち御
鏡かがみ不ふ照てらしてりつてその善惡ぜんあくをさうの。まうを智慧ちゑの量目りやうめ

百斤以上ある者と上品の智者と定め、是と稱する為の
者、新製の烏帽子と賜ふ。目方百斤以下十斤迄の者を
中品の智者と定め、是と稱する。新製の頭巾を賜ふ
その量目十斤以下一斤までの者と、下品と定め、此者の印は
頭へ白紙を附させ、さうに目方ある者、平人の平の字と
朱印あり、額へかま、さく悪智の者、速く御所置あり、さく
開化の御慈情ある者、此者の印は、額の真中へ「悪」
の字と黒印あり、押、さく上下の人を、さく五別の印
と、私にさくを、厳く禁む、往来する人互に、さくの有りか

見らるるもの、さくは、さくのやうに、智恵のありき者、衣類を着るさ
つて、智恵ある顔、さくさく、さく下品平人も、印あり、さくさく、
さくさく、さく磨き、さくの中、さく悪し、さく黒印の者、顔を見ら
さくさく、さく戸口へ、さく出さく。さく往来と、さくさく、
さく正れ、附の悪人が、一目べ、さくさく、さくさく、さくさく、
事に、誰も、さくさんと、さくさく。是非とも、悪智と、さく止て、額の印を
消すと、額より、さくさく。さくさく、世の中の人、さく普く、智を
磨き、さく終ら、大業の發明あり、さくさく、さく此、秤座へ入
さく貴賤、さくさく、さくさく、さくさく、さくさく、さくさく、さくさく、

平人

「あつたてのうさぎとさつたてのうさぎ
ちがふのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎ」

あつたてのうさぎ
銘賣の猫三上がんの

智者あつたての

烏帽子とさつたて

市中と

高ふ

三学の師匠浅井

学門下品の印



白紙と

往来

中品

「あつたてのうさぎとさつたてのうさぎ
ちがふのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎ」
これぬらんといふうさぎ

あつたてのうさぎとさつたてのうさぎ
ちがふのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎ



あつたてのうさぎとさつたてのうさぎ
ちがふのうさぎのうさぎ
うさぎのうさぎ

けいせい帳役の者大音おほね第一番あはら銘賣ねいばいの猫三ねこさん第二番ふたばん浅井あさい学門がくもんと呼よあげある。ささままいい人ひと智ち試し所しよああの中央ちゆうおうおお吾われ國くに
 三の御宝ごほうのううちちある智ち惠ゑの秤はかりととままをを上かみ座ざああの人品じんぴん區別くわつべつ
 の局長じやうぢやうととままめめ量りやう目め察さつ書記しき役やく並ならりりかかいいりりああの非常ひじょうと
 護まもる。市兵屯しへいどんとと見みて猫三ねこさん肝かんととひひややてて恐おそるるを。量目察りやうめさつ
 姿すがたの賤いやしを見みああるるどどりりん。廉れん怒どおお扱あひひて秤はかりおおけけりりかかその
 目方めがた莫太もくたああるるににおおどどろろささええ一ひとここををいいくく見みううけけおおよよりりぬ
 イいヤやままごごああるるくくササテテああままごご平へいららりり。銘賣ねいばい猫三ねこさんのちち忽とつの
 目方めがた百ひゃく斤しんととハハ必ひつととよよぶ。書記しき役やく其その名なとと目方めがたとと書留しよるいれ

局長じやうぢやう御寶ごほうの鏡かがみををりりて渠みちか面おもてを照てらら一ひと見みて一ひとままんんト
 見みううけけおおよよりりぬぬちち忽とつのめめるるかああままばば此こゝ烏帽くわぼう子この上品じやうひんは
 智ちを稱なづる賜物みづぶつゆゆへ常じょうに是こゝを冠かんむりりりん渡世わたせせせよよととままされ
 ける第二番ふたばん浅井あさい学門がくもんの姿すがたいいりりめめけけままば量目役りやうめやく
 是こゝとと智ち惠ゑの秤はかりの棹さしををひひと思おもひひののる。真綿まゐん此
 包たぶを掛かくるる如ごとくくああるるままは一ひとここををいいくくかかりりひひの外ほかおおちち忽とつが
 るるいいヤやままごご下くだるるささんんととままららかか止とどりりななりり。浅井あさい学門
 の智惠ちゑの目方めがた三さんつつぐぐに九斤くまへ七十目しちじゅうめととよよびびけけままは書記しき
 役やく其その名なとと目方めがたととああるる一ひと局長じやうぢやう下品げひんの印いんの白紙はくしととまま

さんとまじりば學門もんを朱のどくりて其前
小きみりて一某を久く和漢の書籍小眼をさし
て幼学の素讀より經書の講釋由致一來し
どころ方今開化の時節小後つて西洋学由修行い
せば生徒由夥多りり。夫と小翻譯の著述由多
くあるをりん。大人大先生と由たつとも身みに
賤しき館賣どとよと同ト席いとをさ。口惜く思ひ
の外かまより智慧の目方。さるりに輕きを見たり。此
秤表小御寶物といり。裏小く依怙をたす含む。質秤小身

とけがして。下品の印のその白紙を。頭小附つかめく
歸宅をいささまばと。声あらうりに之けま。局長御
鏡おて面を照しつ。長なが汝が身の愚あるを知らば
此御宝を質秤と譏あざわらする。汝が腹中をりけ小
譬て。いさささんよくまけ。それ市中小りか元手もとてなき
商人他借をして家蔵を飭るに。その内證うちしるしを考る
ぬりのち。此家を見て。金持志やの分限ぶげんとやのと。大
丈夫どうぶ小思ひて。必用の金かねをあづけ。大損おほいそんをして肝きんを
潰せど。後悔こうかい先小くぬ者多くりり。汝由おれちまに

ひとしく。腹中をきくぬりの。大先生とうやまんど
ゆ。その肺肝を觀者。まこと此秤の目小見るときの智
惠のつるる。あはらうなり。汝三学を習ひて。其謬哉
正しん。口小教書ふゆ著いさび。智者ともり。古人の教
古人の智惠小ん。汝がちあふあふ。そまをそのま
おゆるら。さるる商人の。左の物を右小。賣がどま
仲立あり。折しゆあふ此書あり。これを讀で聞せよ。
とつて。取小足らぬりの。せめて史記ありとも。出
一是も童の初学小する。實語經

とまへ。イヤそまが望ありと。うまがさうま。うまは
空あて。山高さがゆへ小貴く。木らるをりつくとつと
とま。人肥くるがゆへ小貴く。アそまもあてよ。さま
ばこそ。いづきの寺子屋小ゆ。汝がどく小うあど。それあてを
山が高いゆへ小く。とくまのふささ。人肥くるゆへ小く。と
るのふささ。そまさあふ。人肥くるをり。貴ひあ
でとるの。智のあるの。とつとひとのみ意るれば。人肥くると
りどゆと。讀ねがら。されば我著外の書物を。教授さ
つて。智あつらざるものを。古人の教正しさを。讀謬て教する者の

こそ聖人の賊有り。汝銘賣を賤めれども。かまひ赤子のあく
 まるをよくし。まご鳥獸猫のまよふ。妙智あるをりん。諸人の感ぜ
 らる。是他より習ひし。業おほくば。我と發明する。智恵なれば
 汝おまざる量目あり。そとよくしたま。此白紙をかいらふつけん
 耻と考まばそのをぢらち。汝が教師とあるとさしとるへを
 学門その理お伏しと白紙をうけとり立さしけまゆま。大智者
 とありて旧来の耻と雪し。此御秤の徳ありたり。

第二号

若智恵の混れまると
 の白紙解する象

智恵のはう重一号了

智恵秤二号

戯述 服部應賀著

小人間居して不善と為し。君子を見て厭然として
 其不善を捨て其善と著とも其肺肝を視が如くある。何
 の益もあらざること。つらに誠おむべからう。あされば人智
 試所ふて第一第二のや。濟第三番に呼る者。白波泥
 吉とらふ小男にて眼を鷹の如くある。何故小や額の汗
 とぬぐひながら。智恵の秤おかづし。其量目百斤ある。

に皆く敬馬さけるうち局長褒美の御烏帽子を携へて
渠が面と御鏡小照し見まひ傍か色たる市兵左右と守
固らせられてのこらう「いかに泥吉汝の顔る智者なり
ささげ汝が幼年よりの智慧のはさらさつぶさに言上
まべ」是も誠お忍入たるかおとむ御覽のどくの私
ふせい智者杯といおひもようば「いやく此秤の目に
ら〜の〜」へと弁舌にてと隠さよびあきらかに
いへ「あうあるりへと童の時を申らげん嗚呼がま〜くも
私と高き竹馬にてよく走り鐵胴の當独樂廻廻一面

歩みぞも上手かり〜が今其智慧目方ふか〜といへ
ども御烏帽子と項く程のちゑともでんと奉らねば
下品の白紙とまはりて早く御暇とくだ〜玉へ〜扱〜
汝ら眼々鼻へ扱る智弁う夫等と目方なるもの
おあ〜汝その汝の奸智と号して人を偽り利を得る
智なれば褒美とおぬり白紙とてささよと汝が今りの
挺事にも友達の品なくとかきめ取ら事があるり〜仰
のぶと〜かさなさう手習にゆきて他の紙筆をとり〜
事もま〜あ〜ま〜さ〜が成人とをりて其心をかたく改

めま^長し^泥一^泥廉^泥の奸^泥智^泥があれ^泥ばこそ百^泥斤^泥の目^泥方^泥が
あ^泥ま^泥し^泥を^泥ま^泥す^泥の^泥い^泥つ^泥ぞ^泥や湯^泥屋^泥で^泥う^泥の^泥う^泥り^泥と^泥他^泥の^泥着^泥類^泥を^泥
ま^泥て^泥戻^泥り^泥ま^泥す^泥と^泥こ^泥が^泥お^泥ざ^泥る^泥「^泥ヤ^泥を^泥ま^泥ば^泥り^泥で^泥ま^泥ま^泥ご^泥目^泥
方^泥に^泥合^泥ぬ^泥ま^泥ご^泥の^泥や^泥う^泥な^泥事^泥が^泥い^泥く^泥ら^泥も^泥ら^泥う^泥「^泥ヲ^泥を^泥
れ^泥く^泥此^泥間^泥扱^泥裏^泥を^泥い^泥と^泥「^泥ま^泥「^泥こ^泥と^泥ま^泥下^泥物^泥が^泥風^泥に^泥と^泥ん^泥で^泥
肩^泥お^泥か^泥り^泥ま^泥「^泥こ^泥と^泥も^泥あ^泥く^泥ん^泥夫^泥を^泥持^泥か^泥へ^泥「^泥ま^泥「^泥て^泥賣^泥ま^泥
「^泥ま^泥「^泥夫^泥等^泥も^泥人^泥目^泥を^泥盗^泥む^泥奸^泥智^泥な^泥れ^泥ど^泥も^泥上^泥品^泥の^泥智^泥
と^泥い^泥い^泥た^泥れ^泥ぬ^泥ま^泥ご^泥百^泥斤^泥に^泥か^泥る^泥智^泥惠^泥の^泥と^泥こ^泥ら^泥ま^泥ご^泥な^泥く^泥
て^泥い^泥る^泥「^泥ぬ^泥「^泥イ^泥エ^泥り^泥「^泥聊^泥も^泥お^泥ざ^泥り^泥ま^泥せ^泥ぬ^泥「^泥ま^泥け^泥ま^泥ば^泥是^泥非^泥

が^泥あ^泥い^泥ま^泥ら^泥は^泥汝^泥が^泥懐^泥の^泥品^泥を^泥ま^泥ま^泥へ^泥出^泥せ^泥「^泥イ^泥エ^泥此^泥紙^泥の^泥ま^泥ご^泥の
う^泥ち^泥あ^泥い^泥何^泥も^泥あ^泥ま^泥さ^泥ゆ^泥へ^泥是^泥と^泥御^泥免^泥く^泥ご^泥ま^泥ま^泥ご^泥と^泥否^泥む^泥処^泥
と^泥市^泥兵^泥が^泥取^泥上^泥て^泥ま^泥「^泥い^泥ご^泥ま^泥ご^泥の^泥紙^泥入^泥の^泥う^泥ち^泥よ^泥り^泥一^泥封^泥の^泥
手^泥紙^泥を^泥取^泥い^泥ご^泥「^泥讀^泥お^泥は^泥り^泥て^泥ま^泥「^泥と^泥膝^泥と^泥り^泥ち^泥「^泥イ^泥ヤ^泥泥^泥吉^泥
此^泥手^泥紙^泥お^泥て^泥汝^泥が^泥智^泥惠^泥の^泥め^泥か^泥「^泥や^泥く^泥ま^泥「^泥と^泥さ^泥て^泥先^泥
頃^泥我^泥家^泥へ^泥且^泥那^泥寺^泥よ^泥り^泥急^泥用^泥の^泥文^泥通^泥が^泥ま^泥ま^泥ご^泥其^泥文^泥言^泥
ふ^泥と^泥昨^泥夜^泥何^泥者^泥と^泥も^泥あ^泥ま^泥ご^泥御^泥墓^泥所^泥を^泥打^泥倒^泥「^泥候^泥間^泥早^泥
々^泥御^泥見^泥分^泥下^泥さ^泥る^泥べ^泥く^泥且^泥無^泥人^泥の^泥折^泥柄^泥急^泥使^泥相^泥頼^泥候^泥間^泥御^泥
氣^泥の^泥毒^泥を^泥が^泥り^泥使^泥賃^泥百^泥匹^泥此^泥者^泥へ^泥御^泥遣^泥「^泥下^泥さ^泥る^泥べ^泥く^泥候^泥と

認まじたれば使賃の外に支度代までを遣はなし早速寺へ
人を遣はなしけしむ跡あと方もなき偽いつはり其う人寺へとまき我
名前を以て風呂敷と傘と銜はさし者あり其時の手紙の
文と汝が持し此手紙とい同文同筆あるは我家と寺
のかたりと汝みさひまるその謀まが金銭といさうるれども
凡慮おろの及ぬ奸智えんちのはさらき感心せむ。いかに一坐いざの者
達た渠れがぶとき奸智の者又手をかへ品をうへて銜はさとま
る事こともやあれば家族かぞも勿論下女下男げにやへ油断あやり
いたさむべしさて此者も黒印くろいんにて免あされねばまぐ

さよきう糾問所へ送るべし。下陣げちんのかたへひらせけり此折
ふしき外國人入きたりて局長きやうぢやうの前へいきてけこれ今
此所を通りあぐる表札ひやうさを見るに大世界ふ二ツとるき
智惠ちゑの秤はかりふて人智にんちを言ことはるが吾われ多年ねん究理きうり學がくと
弁べん勵れいして天地間てんちかんの理りとさくらむればまが上かみふとの智者
ハ世界せかいになきと思へども其量目りやうめく何程いかんある夫それと云
ることを希望きぼうま長し夫それもりのとやまきなるが見らるるど
とく今日の試し檢人けんじんいま終おひざれば番外ばんがいに加入かまること
成なりがと一明めい且かつ来きりなば貴殿きでんの智惠ちゑ何程いかんとゆか

過

分の送物ハ
后小利を得るの

知恵あり

将棋



「こゝろ

うつろひ

細と

こゝろへ

及物とよまふ

きつと何とせ

百あませといふ

ちひらるゝ

いふまゝに

百りやうで

志まぬと

盲人

智眼とりて

将棋を

よくさす

「土風が

どり火がまへへ

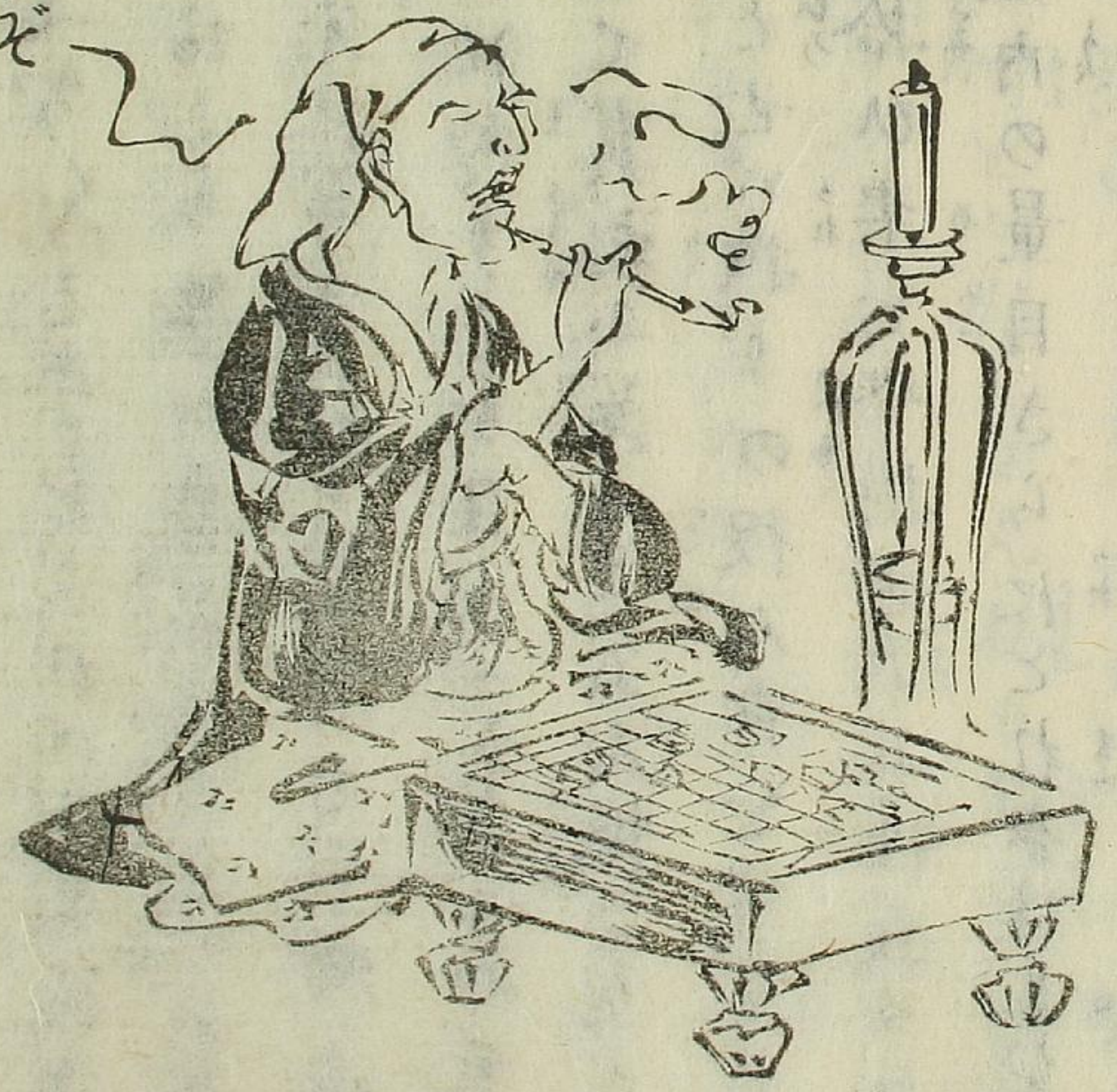
お茶まつへぬ

まつて

ハテ

ふと

そぞ



試^し檢^{けん}まべー今日もペケくと手^てをふれはうるはき
あぐ^{あぐ}出て也くそのはとも第四番^{よんぱん}吝^{しん}北内^{きたない}と呼^よわげ
らまて北内^{きたない}の鼻^{はな}の先にぶらさがる智^ち惠^ゑの全^{ぜん}願^{がん}此
あぐ^{あぐ}ーげお御^{おん}秤^{てらり}にかりーが目方^{めがた}がまきあや天
井^{てい}へもねらげらまて真^ま逆^{さか}お落^{おち}るごぬん懐^{なつか}よりき
まぐ^{まぐ}の品^{しな}ととまか^かとせバ掛^かりの役^{やく}人^{ひと}声^{こゑ}をあげて
笑^{わら}ひをかろそれを拾^{ひろ}ひ渠^{うれ}とぬ抱^{かか}せーお怪^け我^{われ}もな
けまバ大^{おほ}音^ねに吝^{しん}北内^{きたない}の量^{りやう}目^めさら^らにこれなけま平^{へい}
の字^じの朱^{しゆ}印^{いん}お候^{こう}と呼^よときく局^{きよく}長^{ちやう}渠^{うれ}と招^{まを}がれて一^{いち}汝^に

がけりさま初^{はつ}あり子^こ細^こあると見る今^{いま}取^とか^かとせー品^{しな}く
はまにるるぞ^ぞされば何^{なに}と^とかくさん私^{わが}も節^{せつ}賣^{うり}のお
とく御^{おん}鳥^{とり}帽^{ぼう}子^こを頂^{いただき}きたくぞんとて俄^{かた}お宅^{たく}へもどり
何^{なに}り智^ち惠^ゑの目^め方^{がた}にるるべきもの^{もの}とと尋^{たず}ねて持^もつる
品^{しな}と只^{ただ}今^{いま}取^とか^かとせーもまをぬち是^{こゝ}なり^{なり}一^{いち}テ智^ち惠^ゑの
目^め方^{がた}にるる品^{しな}とい珠^{たま}しいをまをるんとや^や一^{いち}おれハ
文^{ぶん}珠^{しゆ}菩^ぼ薩^{ざつ}と辨^{べん}天^{てん}の御^{おん}影^{かげ}でぶさるそも文^{ぶん}珠^{しゆ}ハ智^ち
惠^ゑのかたまり弁^{べん}天^{てん}も智^ち惠^ゑ弁^{べん}財^{ざい}を守^{まも}るといふを
いまご御^ご存^{ぞん}トこれるきり一^{いち}是^{こゝ}ハ一^{いち}段^{だん}の^のかみひはきま

そのらんふやの面を何せへにり「されば大般若を
翻譯すれば大智慧のこぞ承りまうた也へ大
あやの宅にまきまき子供提の小般若も智慧の足
にもと持叅をばいたし「まうた也へ大
おかいまとうるその外に「何もないう「い
まる此朋卷の中こゝろ古金と大札で千兩腹はらおまいてお
てまわす「そまはま「何の為ふぞ「何の為とハ曲まがる
い此世の中に何が貴うたひとゆふとて金かね不ふと貴うたひ
のちるけまハ大金と持もつ愚者の私こゝろの方かたへ名高なごき

智者學者がぶぶつて且なん那樣さまぢやの福の神トやのこ
たつとむのを見つおつけ此世の中も智者ハ貧まいく
愚者も福貴とさとりまうた私こゝろその分ぶんの智者を
願のぞふ望のぞちをけまど由折よりあの吝せうの金かねとてごも
無む智ち短たん才さい杯はいと影かげといいえれるが口くちおけまおのれ
やれ清せい貧ひん獨どく福ふ兼けん帶たいの身みとありて御烏帽子ごうまを
冠かんさまきに智慧の守りと身おつけ「其功徳ごこうとく
さうにまきハおもい「あるい「これらこゝろ御教訓ごきょうくんを
希ねがふ「「よくととひ「都みやこて福者ふくしやをかこくまにて

一生をいやまるりのあるが汝をさくやく小猿さる智恵と
捨て正身ただ小智門ちもんの扉かどをひらくんとあつせば吾よくさと
まべしとも愚者おろちの足事あしごとをあらねば天上へはかへり
まぐも慾心よくん限りなき也へ寝ても覺ても心こころを苦くるしめ
大金と残りて一生を終れども其子其意いと續ねば
家名いへなを失ふ者まづり是子孫と見る智恵の眼め
がなき也へありさて智者ちよも足事あしごとと一れば貧ひんなれ
ばひんおまうせて樂たのしみが也へらと腹はらをやむといあし汝が
家へ入いれ込こ智者ちよも衣食住いしょくじゆ小奢ちやうを尽つせばはまうぬと

口くちにはいへどさつりはまつと大晦日おほひ智恵とみるもの
弁古べんこでも一夜いちやが越こねば留守くしゆをたひ年中ねんちゆう愚者おろちに
頭あたまはぐぐんをこてハ智者ちよといひをまひ汝文珠ぶんしゆ弁天べんてん
の御影おんかげと身みおはけて智恵の目め方が増まりのあるハ經書きんしよ
箱はこと脊せき負おても學者がくしやにるる大般若だいはんにやはらうのとと轉讀てんどく
風かぜが悪わるくを除のぞくハ画えふかいと名な劍けんと見ても眼めく血ちの
こるまともあろうとあけりやく金持かねもちの衣えを着きると懐ふところ
へ金も涌わびさまバ富とみも徳とくも其得うる道みちともつてせざれば
招まひでも益えきあり汝今いま智恵の眼めを閉しまふくバまづ両眼りやうがん

をあるものとして心をもつて物を観れば見へぬ処も見へる
 かり一事の悟ハ万事おろはる會得也さうと云ふまへに
 可なりがさやく今日まで定理おろさき闇純の身も公の
 智燈をうけしとて開明の眞加の爲此千両ハ學校へ献じ
 れば今一度御評おかしと願ふまうせまをハち評お衆
 て見れば一リンの愚者の身も一念頓発の智恵の量目百斤お
 頭ハれハ局長御烏帽子お添て長者の家名と賜ハけり
 第三号 局長と外國人と究理の問答の条
 智恵評二号終

智恵評三号

服部應賀著

夫軍陳の計策智畧の傳法也印刷して世上お
 普く發兌お及べハ其智策歎味方の手おありが
 由へ夫が爲お及て敗北おとるもつらん夫を以て是を試
 みる此前卷第二号おハ庶人せいて術盜の難を免ら
 令んがためお白波泥吉の寓名およせて奸智の働きおわぐ
 て著一 官の許を蒙りて疾お賣弘むるがやへお市

在の中お其説せて見者あらぶ其難なんの除防よふもらふべき
小兎角身しんの為ためもらふ本類ほんの誰たれも面白おもしろうねが此小冊
の如ごとくづろ三錢五厘さんせんごりんかひてたらへ無代むだいもせよ手てを出だ
す者ものもらくまけまば眼めもら耳みみもら入いざれば既すでに前号ぜんごう
賣出うりだして以来いらい其説せ不依佈ふいふとら術じゆつもらあら家府けふ下げ小屢
あらつて新聞紙しんぶんしもら見みるらされば彼かの軍書ぐんしよの如ごとく予よが目
的めとらなる味方あつちの庶人しよじんの夫おとこと見みざらうちもら敵たきとらなる奸盜けんとう
い早く是こゝと求もとめ其術じゆつと為なすらうちもらかり人ひとが藥くすりの害がいドん
毒どくとらり味方あつちを害がいふ手引草てりやくとらなるら意外いがいの咎とがと

己おれも責せめて筆ふでの頭かぶを挑ひむらうちもら今いまの詮せんあり誠まことも夫
等らあら筆ふでを採とりてやせまと取とりてやせまと思おもへば更さらに論ろん
を言いありそも盗ぬすを防まぐらあら其身みもら應おこぜぬ他人たにんの
智策ちさくよりも各々あつちあつちの意いまうせぬ家内けいへひそうもら一策いつさくさ
へ設たてかくとらなる愚計ぐけいを以もつて奸智けんちを生捕いけとらとあり又術じゆつ
を防まぐらあらねん親族縁類しんぞくえんるい知己ちぎの者ものへひ金銀雜物遣きんぎんざぶつち
取とりてあらるらぐらの證あかしとらなる符合ふがうとらなるらあらりらり
見みるらねん使縁類しえんるいの印いんあらるら風呂敷灯燈傘ふろしきとうとうさんのらいを以
て證あかしとらなるとらなるら證あかしもらあらるらねんとらなるらよく下女下

男小ざとよとべー然もどり無事永くづく時ハ其
符合も手筈も念りのおまじが都て盗難火難病難も
毎日あつものゝ家内中忘ざれば用心の家實ハ失ハば
以上是を以ち忍の秤の助言とを扱本文人品區別所ハ
ハ今日の才一番。藝者渡世糸川駒次と呼あげらまて
駒次ハ二階のどろどろ踏るもたれどまごふとも見ぬ
天のそ〜どへのぶろがだ〜くおまじと〜と秤坐おまじとみ
出ツイロおまじ〜。へい今日の皆さんとの坐敷言葉ハ口
元へ出かり〜を吞あ〜て述ろやう「私を智恵がまけ

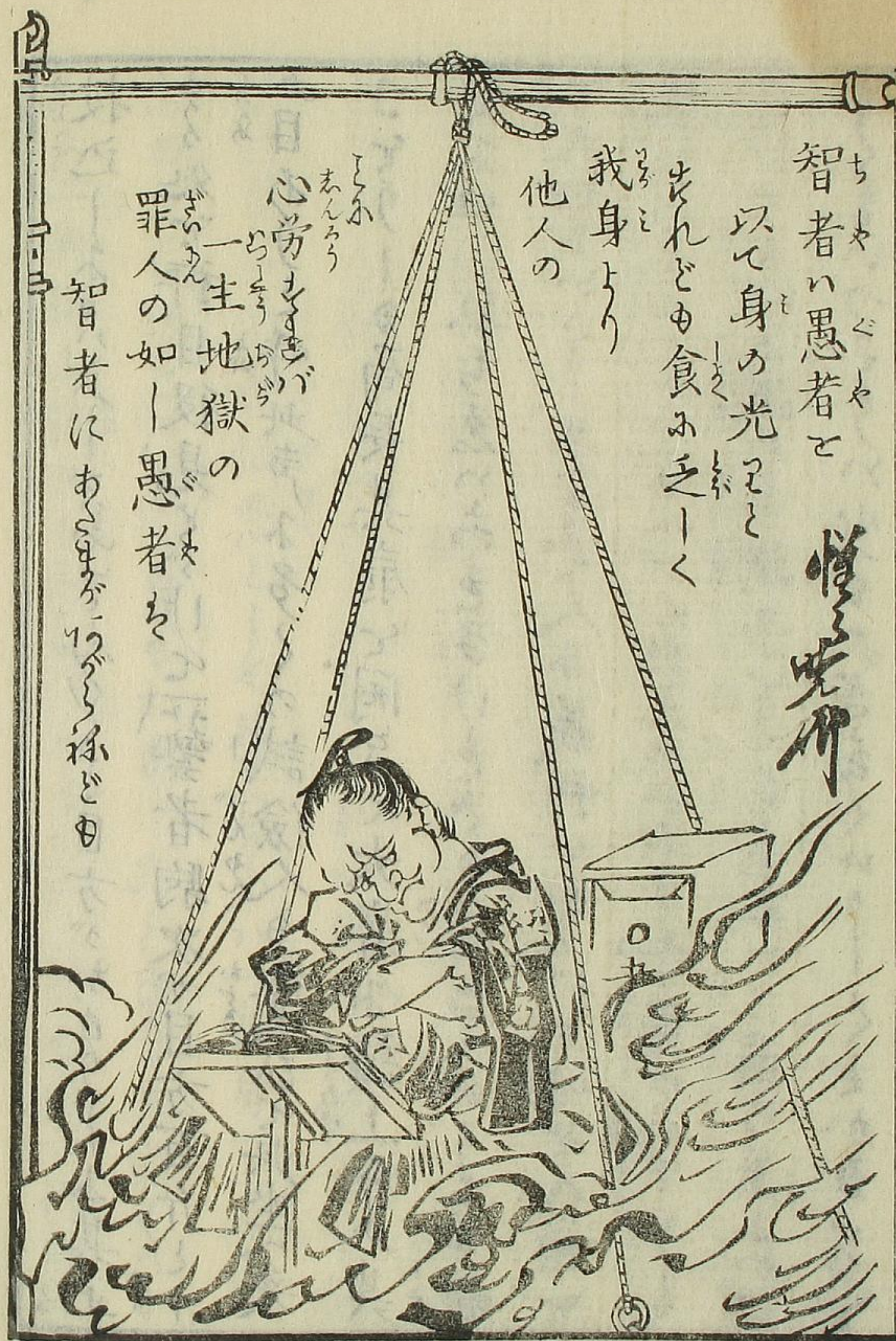
れば賦金をおさめ衣服化粧ハ大金の次頁本をかけた
のあのお客の餌お口のかつろを待たどあまじが目方お
かつろものどろハ借金の外筆筒もかつろろも風が
吹バ飛ぶろりの身更御秤の毛ハ御めんを願ひたく
ぞんむらまども市中一般のそめへ夫おあろまどといろく
と考へをろろち昨日ち忍のおひ御方が御秤ろろち
ことろ轉どことろ聞ま〜とが私を智恵がまけとが其如く
落ろろろろびもいとま時をハ掛さるのハ慰おか笑ひ
草とろろのハよけまども其時が忍おひろまるといれハ

かのうちげいーや又とあろびげいーやのと評判が
 高くありん新聞紙へでもだされまうとひとり母が
 養ハせぬ私の一心を此扇のうちにをかきまう
 せーとむかむづうーくも此扇を御評みかけ多ひん
 私の智恵の目方を御こめーくごさうりひとへ願ひ
 上まうと扇一本をさー出ーけまう量目役共否を伺
 ひけまう局長偽然とーと答へまう長其身の一心哉
 大めつとらまう渠が身もかあどあーあり其扇くろー
 くの御評み試せとあまバ五寸をとらの女扇を御評み

投込ーふコハふーごやまんとくと目方があめりーふ其止
 まる処を秤目役見まうけて一藝者駒次が目方百斤と十
 五目ありと呼此声も多くの試儉人も敬馬ひて此坐へ来
 つとりーも局長其扇を閑とて大音も讀上るも其
 文不日○私ち忍いあま子けまも負さうのうちに親
 と大切ないー是まも人ふ義利をかくば三味せん箱を
 米びつとぞんとゆへんれんの二上り手筒の三下りも
 ひけども心不誠の本調子とこまもぬハ三助の糸ふかけ
 まくもいつつりの少もあまざまうくひうーくとかまうを



大食して我腹を
豊年と思ふ
是れ
天の
如く此二人を
普通の秤ふるは
試みる愚者の方重なる



智者の愚者と 憎し
以て身の光を
されども食ふ乏しく
我身より
他人の
心労を
一生地獄の
罪人の如く愚者も
智者にあらずとも

三度までよこ上あかのひに其扇を押し戴かぶアラうふと必人と
 して此上の智恵ちゑをみせん。さむがとを百斤以上の目小
 あらういと不あふふ処へ一人の老父らふをこいべ「恐おそみぐう
 申上ままを私を此駒次とやらぢの地主ぢでござりませうか
 事ことの志こころは長屋中ながやちゆうの藝者げしや杯はひいて近所きんじよの手前てまへ若
 者わかしよの為ためふもよろしからねば家守かみへ店立たみだてを度々申付まを
 ぐ唯今ただいまとどめて其風俗ふうぞくを見うけ殊ことふその扇あふ裏表うらおもて
 ふき心の骨組ほねぐみをあらう折目かじりめ正ただしく要ひつの志こころより一ひと処
 と見うけまはさる店立たみだてのありひもよろび吾一人息子の

婿むこいさよを印しるしふ其扇あふを二兩二分ぐらひみべ求もととくと迷
 け色いろが其あとしり。私わたくしの二兩。私わたくしの三兩。私わたくしのとんで十兩。私わたくし
 ニツとんで三十兩。私わたくしの五六人飛とと一ひとに百兩とまうで直ただぐの石
 ぎどり局長扇ぢやうぢやうせんをうさば長「汝ならの安物やすめをうり買かたがう
 ぬへ鼻はなをかこゝ又またのらくらする嫁よめをこつ。さのみちるゑのあま
 男御秤おとこごころりの徳とくふよつん百斤の目とあり一ひとうば其御礼ごれいの為
 千金せんごんを上納じやうなうせしが其男おとこう見れば此者こゝろの智恵ちゑの目方めがた過
 分ぶんあまが千兩の安やすけれども當時たうじ藝者げしやと不景色ふけしきを
 が吾仲わがなつふ立て古今こゝろのいある智恵ちゑの安賣やすう正札ただしやく附つ五日圓

買人あけむが吾もとむとのさきう処へ始の親父又も
 まいで何とぞ直段を「イヤくまうぬく」汝は千金の者を
 一兩二分うら付あげろが其やうな家の嫁あはぬ釣合ぬ
 不縁のゆゑひざぐれく「コヤ駒次御褒美の御烏帽子を
 頂戴いさせと渡を処へ万兩株の家の主人をみいで「此
 女はと千兩が二千兩でも金いするの心をさうん何卒私へ
 か拂下と乞へば「夫はさういさらば此扇をそちへさしむと婚
 義を互の實意ありアうぬでたり」と稱さまふ処へ
 彼外國人入来りて直と試を望まけむが「貴殿昨日ペケ

今日日朝のやくそく。今日ロま遅けむが今日又ペケ「私今日
 早く森上の処きのみ此処へさてうう犬失その犬連れてくる
 者へ五圓やうよろひの布告ふておそくあう「おるこ
 無窮の天地间と究理たる術あれが府下においる犬の在
 処いたをさくあまべさる五圓いごうて扱ひいふ。私先
 生不同ことこれが暫時此椅子より多し叔先生と
 天地の理を窮る小身を天上に登り又地下に小入る其理
 をさるめさうお外「いうべ天上に小登り地下に小身を入る
 とのさるべさ「又先生の天地を返逆する術ありや「い

て天地を動うごせしめざるべき長又先生ハ東西あし廻まわる大陽ひと
大陰つよを南北みなへめぐらせる術わざありや外「つるまのた途と法りゆかいと
のこをつつし夫それ等らいいべん人ひと力ちからの及およぬあり長「さをれを天
地ち間まの説ハ皆推おし量りの説ハ正といひしるも古こ説せつハ日
月ひがめぐるといいしるが近頃ちかの地球ちゆうがめぐるの説を発明めい
するが由へ引かとつし説せつを附會くわいをもども茲こ古こ説せつと
新しん説せつの是非ぜいを争者ありて互たが互たが其その意いを慕とも百
聞もんハ一見けんハ志を正を見みざるも互たがの論ハ是非ぜい
かしまして譬天上てんじやうハ星が地下ちかハ身を入て其理りの正

を確定ていするも是これを動せしめるはたとあらば在あらず従したがひての
附ふ説せつハ志が知てもよしあらざらばも國こく民みんの利害がいハ
及および其例れいハ日月にの蝕ハあらば天てん下かの人普たがく是を志る
其その道みちを学者がく者の是これを前ハ知而し己のたがひ之又また星せいの説ハ夫
ハ一といふも此こ星せいの名ハ彼の星の名ハ此星せいハ何
年ねんハ斯々さまざまありと其その頭あたま晦くろを志るもこのあて他たの有益う益ぎハ
るもあらずば理りを志りてさへ雨あめをれば理ハ當らぬに
かいてハたも無益む益ぎの業あり誠ハ推量すいハ當らぬの
ゆへ吾われ富ふ士し山さんの高ハ外國こく人にん四し五ご人にん量りとしても皆

たゞ小音鎌倉將軍の時小明日の出火を今日より
武士ありしが是ハ世界大一つ小べし其外愚人小
身の頭痛を以て二日先の雪や雷明を志るものあま
ども究理発明の看板を拭きざり悪風暴雨の兆も
あつて人命を魚腹に葬り大金の何物を海
へ捨る船もあつて聞が是等も究理尻の尻志る
と吾を思へり

此余談四号小續